

特集「システムソフトウェアの新しい潮流」の編集にあたって

益 田 隆 司†

本特集号は「システムソフトウェアとオペレーティングシステム研究会」が、時代のニーズにマッチした新しいシステムソフトウェアのあるべき姿を追求するために企画したものです。特に、この数年は、ネットワーク、モバイル、マルチメディア時代を迎え、システムソフトウェアの重要性が改めて認識されています。従来のシステムソフトウェアの話題に加え、連続メディアの扱い、高速ネットワーク、モバイルコンピューティング、並列分散処理、組み込み型システムのためのソフトウェアに関して活発な議論が行われています。

本特集号の編集、査読にあたっては、ゲストエディタを私が担当させていただき、研究会の主査、幹事、運営委員の方々を中心に編集委員会を構成しました。各投稿論文に対して、専門が近く、投稿者と組織が異なることを基準としてメタレビューを選定し、さらに、2名のレビューを割り当てました。論文査読の過程においては、論文の質を高めるために、採録、条件付き採録、不採録のいずれの場合においても、教育的指導を心がけることを編集の基本方針といたしました。レビューの査読判断が分かれたケースが数件ありましたが、メタレビューの適切な判断と編集委員会での慎重な議論で、採録の可否が決定されました。投稿論文総数は21件で、最終的な採録数は12件でした。第1回目の査読で、16件の条件付き採録となった論文のうち、11件が採録となりました。最終的に不採録になった論文のなかには、再度の修正により、採録の可能性がある論文も何件ありました。編集委員会での審査の過程で、論文採録の条件を単純に「有用」、「新規」とするのではなく、そのような判断に至った理由を抽象化、一般化された形で、査読や著者が論文を書くときの指針として集約し「システムソフトウェア研究固有の価値判断」として形成することができないかといったことも議論されました。これまでの2回の特集号に比較して、投稿件数、採択率とも有意な差

はありませんでした。

採録された論文は、PDAや携帯電話等で使われるシステム技術、本格的インターネット時代に必要とされるルータやWEBサーバにおけるシステム技術、重要度が上がっている実時間処理技術、等の先端システムソフトウェア技術に関するものが中心をしめます。結果として、本特集号の企画を満足する論文を集めることができたと考えています。

最後に、短期間のあいだに厳格な査読を遂行し、本特集号を刊行できたことは、編集委員の方々をはじめ、メタレビューア、レビューアの方々の並々ならぬ努力のたまものです。この場をかりて心から感謝いたします。システムソフトウェアの分野は、情報化社会のなかでの重要性の大きさにもかかわらず、そのなかの一部を除いては、日本からの発信が乏しい分野です。本企画が、システムソフトウェアに興味を持つ人々を増やすとともに、新しい技術の創出に向けて少しでも貢献することを願う次第です。

「システムソフトウェアの新しい潮流」特集編集委員会

- 編集長
益田 隆司(電通大)
- 編集委員
石川 裕(新情報), 木下俊之(日立), 並木美太郎(農工大), 西尾信彦(慶大), 河野健二(電通大), 徳田英幸(慶大), 柴山茂樹(キヤノン), 樋地正浩(日立), 福田 晃(奈良先端大), 中島達夫(早大), 加藤和彦(筑波大), 高野陽介(NEC), 光澤 敦(Sony), 早川栄一(拓殖大), 猪原茂和(日立), 河野真治(琉球大), 高田広章(豊橋技科大), 梅村恭司(豊橋技科大), 新城 靖(筑波大), 毛利公一(農工大), 瀬河浩司(電総研), 和田英彦(横河電機), 多田好克(電通大), 岡本利夫(東芝), 谷口秀夫(九大), 大久保英嗣(立命館大)

† 電気通信大学